■第１章　概説■

日本における死者の枕は、弥生時代にさかのぼります。

紀元前 100 年ごろ、弥生時代中期後半に、手ごろな大きさの自然石をそのまま用いた枕石（まくらいし）や、丸太材を半分に切り落とした木製枕など、シンプルな枕が出現しました。

その後、古墳時代に発展する枕の中で、現状で最古の枕は、古墳時代前期に造られた、兵庫県権現山（ごんげんやま）51 号墳で出土した木製枕です。

死者の頭を置くくぼみを作り、全体に鮮やかな朱（しゅ）を塗っています。

枕として作られたことがわかる、初めての事例です。

その後、大阪府の久米田貝吹山（くめだかいぶきやま）古墳や、香川県の磨臼山（すりうすやま）古墳のような、石棺の底に枕を彫りこむ造り付け枕や、石枕や埴製枕などの、独立した枕が作られるようになります。

また、石枕はさらに分類でき、奈良県伝渋谷（でんしぶたに）出土例のような、装飾性が高い石枕と、山梨県大丸山（おおまるやま）古墳のような、石棺の底にはめこんで使う石枕にわけられます。

古墳時代前期には、広い地域に特定の形の枕が分布することはなく、古墳ごとに特色ある枕が作られ、使われました。